

# 山に親しみ山を想う(13)

## — 濟州島の寄生火山 (1) —

岡本 毅

### 目次

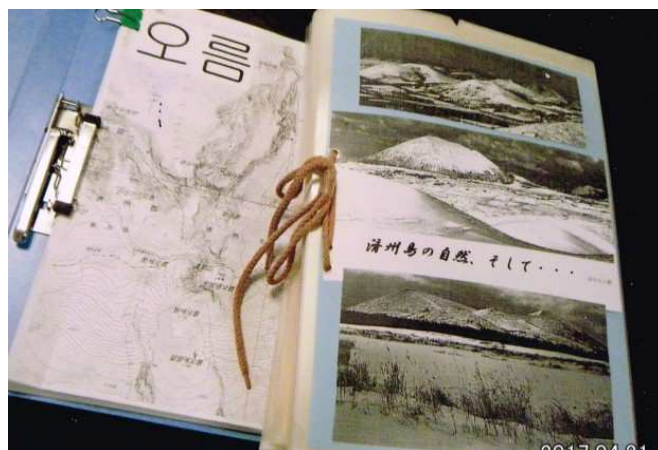
- 1.はじめに (オルムとは)
- 2.オルムを安全に歩く
- 3.四季のオルム
- 4.オルムの火口湖
- 5.オルムと現代史
- 6.オルムと墓
- 7.チョットした話 ①
- 8.チョットした話 ②

### 1.はじめに(オルムとは)

(1) 朝鮮半島の最高峰は、白頭山(ペクトサン、2744m。別名、長白山)で北朝鮮と中国との国境に聳える。朝鮮半島の南半分の韓国に限れば、最高峰は濟州島(行政上、濟州特別自治道)にある漢拏山(ハルラサン、1950m)である。ソウル勤務から濟州島へ転勤になり、約4年間在住した。濟州島は、面積1845平方キロ(東西73km、南北31km)で佐渡ヶ島の二倍強に相当する。島の中央に休火山の漢拏山が聳え、その周囲に待立するように大小の寄生火山(濟州島ではオルムと称する)が取り囲んでいる。このオルムは島内に368座存在することが確認されている。在勤中、毎週のようにオルムを探訪した(会報2016年6月号の随想「凝視と静観」参照)。

在勤を終えて帰国するまでの間に、355座を探訪した。愈々帰国を控えて、オルム探訪のメモを急遽ワープロ打ちして纏めようとしたが、319座まで打ちまとめたところで、辞令が出て中断してしまった。ワープロ打ちの小冊子を作ろうとした意図は、4年間のオルム探訪を形にしたいとの考えと事務所の後輩がオルム探訪をする際に参考になれば良いとの思いにあった。参考にしてもらうために、韓国国土地理情報院地図を添付した他に、車の駐車場所、登山道入口、ルートができるだけ詳細に記録した。

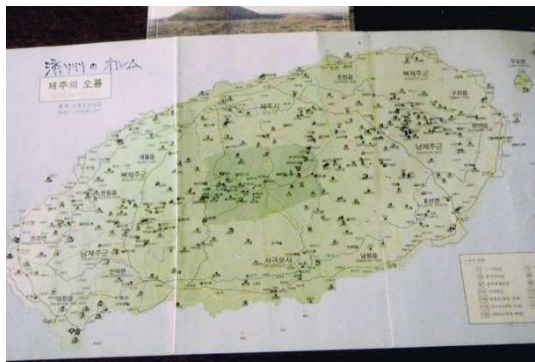
この小冊子「オルム」を読み返してみると、メモをそのままワープロ打ちにただけで、取り留めのないものであると感じたので、別の視点から本随想の形式で取り纏めてみることにした。(319座のオルム探訪メモの小冊子「オルム」は貸出できます。)



(2)オルムについて、濟州道内で発行されている関連の刊行物を総合すると、次のように説明されている。「オルムは噴火口をもち、その内容物が火山瑣屑物で成っており、火山丘の形態をなす。殆どが、スコア(SCORIA)で成る噴石丘である。島内に368座ある。漢拏山国立公園内に48座、海拔200m~600mの間に149座、200m以下に143座、600mから漢拏山国立公園の間の地域に28座が全島にわたり散在する。368座の中で、山頂火口湖をもつオルムが9座ある。」

「オルムの語源として、最も有力なものは、「登る」という動詞オルダの名詞形という説であり、他に蒙古語の「山」の転移説などがある。」「オルムの外形は、円錐形、円形、馬蹄形、複合形に分類されている。」濟州島は、「濟州火山島と溶岩洞窟群」として2007年6月に韓国で初めて世界自然遺産に登録されたことからわかるように、火山活動に関連した溶岩洞窟が多い。

## 山に親しみ山を想う(13)



(3) オルム生成に関連した伝説の要旨を紹介する。

「昔々、ソルムンデ婆さんが島に住んでいた。巨体で漢拏山を枕に横になると、両足は島の沖合にある小島に掛かる程である。濟州人が海を隔てた半島の陸地に赴くのは大変不便であった。婆さんは内着を一着作ってくれたら陸地までの橋を架けてやると約束した。内着を作るために、綿布100ドンが必要であった。

島民が綿布を集めている間、婆さんは前掛けで土を運んで橋を作る作業をした。この時に、前掛けからこぼれ落ちた土塊がオルムになった。島民の綿布集めは、99ドンまででどうしても1ドンが集まらず、婆さんの橋作りも中断してしまった。

このため、濟州島は、今も陸地とつながっておらず、離島の不便をかこっている。」というものである。この伝説の巨人婆さんには、日本の巨人信仰ダイラボッチ伝説を彷彿させるものがある。微笑ましい。

(4) オルムを最初に歩いたのは、2004年の2月初め頃である。濟州市内の遊園地のようなところにあるオルムであったが、それがオルムであるとの意識はなかった。オルムについて知らなかったのである。

2004年2月下旬にセビョルオルムの麓で行われた旧正月の山焼祝祭を見に行った。オルムの山腹をハングル文字のテボルム(旧正月の意味)の字の形に焼き、最後にオルム全体を焼くのである。奈良の若草山の山焼きと京都の大文字焼きを合わせたようなものである。夜空を焼き尽くす壮観に魅了された。この時、

オルムについて知ることになる。

最初にオルムに登った記録は、6月27日のチョルムルオルム(標高697m、比高147m)である。チョルムル自然休養林に遊びに行き、休養林内の展望台があるチョルムルオルムに意図せず登った。そして、7月24日のセビョルオルム(標高519m、比高119)



山行が探訪を意図して登った最初のものとなった。夏虫の鳴き声を聴きながら、漢拏山を眺め、そよ風に吹かれた爽快さが、その後の病んだようにオルム探訪をした契機になったようである。オルム探訪メモに「ツバメ飛ぶ オルムの頂き 胡座かき ハルラの山と 我睦みあう」と柄でもないことを記している。セビョルオルムには、頂上からの漢拏山の眺めと北端の峰にある墓の姿が気に入って幾度も訪れた。

オルム探訪メモを拾うと、2008年1月19日に355座目のタレオルムに登ったのが、最後となっている。残った13座には、標高1700m以上のものもあれば、133mの低いものもある。標高が最高の1810mのチャンゲンモックは残念にも登る機会を失った。登った最高のオルムは1666m(比高150m)のワンガンパウイである。低い方では、41m(ソアルオルム、比高21m)である。比高の大小でみると、大きいのはオベックチャンゲンの389m(標高1639m)で、小さいのはカメチャンの9m(標高146m)である。カメチャンは牧場内の盛土の

## 山に親しみ山を想う(13)

ようなものである。他方で、海岸近くのオルムで標高395mと低いのに比高345mの尖峰もある。(山房山)



オルム探訪の難易は、標高や比高とは比例しない。

人の踏み跡(以下、人跡路という)があれば、比高400m以下の登高であるから、それ程厳しくない。しかし、人跡路もなく、かつ藪や茨(濟州島には茨が多い)の中を歩くのには、大変難儀した。

例えば、易しい方ではこんな探訪もあった。

標高1374m(ポルレ)、1332m(オスロン)、1352m(イスロン)、1223m(ワン)、1132m(チャン)の5座を歩いたが、比高は各々104m、73m、38m、38m、27mと小さく、茨もなかったので一日で達成したことがある。

(つづく)